

聖德太子讃仰研究会『勝鬘經義疏』研究記録(抄)(その二)

——『勝鬘經義疏』現代語訳と研究との抄録——

小田村寅二郎  
梶村 昇

太子『義疏』訓点文(『昭和会本』)——『勝鬘經・原典』の「序説」について——(文中のゴチック字は『勝鬘經・原典』の文字)

就<sup>ツ</sup>第一序説<sup>ノ</sup>。初開<sup>ハジメニ</sup>為<sup>ス</sup>レ二。

一通。

一別。

如是等<sup>ニ</sup>五事普<sup>ハ</sup>。貫<sup>ハ</sup>衆經<sup>ヲ</sup>。故名<sup>ニ</sup>通序<sup>ト</sup>。遣書感<sup>けんしよかん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>正<sup>はまさ</sup>。為<sup>シテ</sup>比<sup>ひ</sup>經<sup>きやう</sup>。非<sup>ハ</sup>為<sup>ス</sup>余<sup>よ</sup>經<sup>きやう</sup>。故称<sup>ニ</sup>別序<sup>ト</sup>。

就<sup>テ</sup>第一通序<sup>ニ</sup>。即有<sup>チ</sup>レ二。

一 明<sup>あかし</sup>阿難<sup>あなん</sup>所伝<sup>しよでん</sup>不<sup>レ</sup>謬<sup>みよ</sup>。証<sup>しやう</sup>人<sup>にん</sup>是<sup>ハ</sup>可<sup>レ</sup>信<sup>しん</sup>。

二 有<sup>ニ</sup>住<sup>しゆ</sup>処<sup>ところ</sup>同聞<sup>どうもん</sup>。明<sup>しやう</sup>說<sup>しやう</sup>經<sup>きやう</sup>之<sup>ノ</sup>根本<sup>こんぽん</sup>。証<sup>しやう</sup>法<sup>はふ</sup>是<sup>ハ</sup>可<sup>レ</sup>信<sup>しん</sup>。

人能<sup>にん</sup>弘<sup>くわう</sup>レ法<sup>はふ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>先証<sup>せんしやう</sup>。法<sup>はふ</sup>由<sup>よし</sup>人弘<sup>にんくわう</sup>故<sup>ゆゑ</sup>後証<sup>こうしやう</sup>。

## 右の『義疏』現代語訳

(經典全体は序説・正説・流通説の三つに分けられてゐるが)

第一番目の「序説」について、初めに二つに分ける。

その一は、通序(どの經典にも共通してゐる序)であり、

その二は、別序(特にこの經典のためにある序)である。

如是等の五つ事柄(「五事」とは、「如是」、「我聞」、「一時」、「住処」、「同聞」をいふ)は、どの經典にも共通する形式の序である。それ故にこれを通序と名づける。「書を遣はした」(勝鬘夫人の両親が勝鬘に手紙を送つた)ことと「仏を感じた」(それによつて勝鬘が心に仏を感じた)こととは、まさしくこの經典(『勝鬘經』)のための独自(特別)の序であつて、他の經の序とはかかはりがない。それ故にこれを別序とするのである。

右の第一にある通序を見てみると、その中が二つに分けられてゐる。

その二つのうちの一つは、仏の弟子である阿難(阿難陀)アナンダの略、後述)が伝承した仏の教への内容に謬りがないことを説明して、伝へてゐる人が阿難であるので、その人は信ずることができることを証明してゐる。その二つは、仏が説法された場所(住処)と説法とともに聞いた人々(同聞)とを示して、この經典を説く根本を説明し、この經典なればこそ、その内容が信ずるに足ることを証明してゐる。

このやうに、「人」は、よく「法」を弘めることができるから先に証明し、「法」は、「人」によつて弘められるものであるから後に証明するのである。

(研究 1)

「遣書感仏けんしよかんぶつ（書を遣はし仏を感じず）」と太子が書かれたお言葉は、勝鬘夫人の両親が勝鬘に手紙を送り、それによつて勝鬘が心に仏を感じた経緯を、簡潔に要約したお言葉であり、また、經典原文の次の個所に対する太子のご解釈の中で、「言ふところは尊者の書を遣はすは……」「勝鬘の黙念して仏を感じるは……」と述べてをられるお言葉とも対応してゐると思はれます。そして次の別序の「時に波斯匿王はしおくおう……」以下「仏の實の功德を歎じたてまつりにき」までの經典原文の大意を、太子は、はじめに「遣書感仏」の四文字に要約されてをられるのであつて、この四文字こそは、原典の要点を見事に掌握せられた素晴らしい御表現と申せるのではありますまいか。

(研究 2)

「人は是れ信すべき事を証す」の「人」すなはち阿難といふ人物は、仏の教へを誤りなく伝へてゐる人格、と太子は受けとめてをられます。すなはち、太子は「伝へてゐる人が阿難だから信ずることができるのだ」と明確に述べてをられるのであつて、太子の別の御著作『維摩經義疏』の中でも、『我れ聞きき』とは、阿難親しく承けて伝聞の謬りあやま無きを明かす」とお述べになつてをられ、ともに、「人—阿難—」を信ずる太子の篤信の御精神がうかがはれるところかと思はれます。かうした所に留意して『義疏』を拝読していきますと、後の第四章「摂受正法章しやうじゆしやうぽうしやう」で、太子が「人」と「法」との「相即そうじく」を明らかにしてをられる個所も、一層生き生きとして理解できるやうな気がいたします。

太子『義疏』訓点文（昭和会本）——『勝鬘經・原典』の「序説」の中の第一の「通序」に当る箇所についての太子の御義疏

如是者。総挙ニ一教之始終ニ也。而物相似。曰如。一物無非。曰是。如来与ニ阿難ニ談ニ其声口。必一・八既殊。金・肉非同。故於レ文曰如。一・八。金・肉雖異。即其所レ明即是一物。故於レ理曰是。我聞者。言。阿難親從レ仏聞。所伝不レ謬。且欲レ表異ニ。外道我自然知之過。一時者。明下如来所説經教其數無量。而阿難得ニ仏覺三昧。一時皆領。故云ニ一時。

第二・挙ニ住処同聞。証法是可信。舍衛是城名。梁云ニ聞物。此城殷富多有名珍。遠聞ニ四方。故云ニ聞物。

国名・憍薩羅。今以レ城目レ国。故言ニ舍衛。是十六大國中之一。祇樹給孤獨園者。樹囑ニ太子祇達園囑ニ給孤長者。二人共立精舍。今以ニ兩主ニ標ニ名。故云ニ祇樹給孤獨園。同聞衆略無也。或云。説ニ此經時。在ニ平後宮。上唯諸天。下唯綵女。闕無ニ大士。不足ニ以此証經。故闕之也。而此經下流通之初既云下放勝光明。普照大衆。豈言ニ復無衆。且今言以ニ住処同聞証法是可信者。豈其挙ニ彼瞻闍宮処宮中綵女哉。是即付囑之時。衆也。故知略。即明。矣。

右の『義疏』現代語訳

如是（このやうに）とは、おしなべて一つの説法（ここでは『勝鬘經』の始めから終りまでの全体にかかる言葉である。二つの物が似てゐることを「如」といひ、二つの物が同じであつて全く違はないことを「是」といふ。如来と阿難の声を比べると、如来は八種類のすぐれた音声を持つてゐるのに対し、阿難は一種類の肉声だけであるから、両者には八音と一音の相違があり、如来の金口の声と阿難の肉口の声とは全く同じではないから、經典の表現（文）

においては、「如<sup>ごと</sup>」といふのである。そして八音と一音、金口の声と肉口の声との相違があるけれども、仏と阿難が説明するところのものは一つのものであるから、意味合ひ（理）の上で「是<sup>ぜ</sup>」といふのである。我<sup>が</sup>聞<sup>もん</sup>とは、阿難が親しく仏に付き従つて直接教へを聞いたのであるから、その伝承するところには謬<sup>あやま</sup>りがないことを言ひ、また仏教以外の教へを奉ずるものが、仏の教へを聞かないで、自分の力でわかつたとする過ちに陥るのとは異つてゐることを表明しようとしてゐるのである。一時とは、如来がお説きになつた經典の教への数は量り知れないほどで多数にのほつてゐるが、阿難は仏の加護によつて仏のごとき覺力をいただいて、仏の中に融け込み、仏の説法を一時に全部領解し、体得したことを説明してゐる。それ故に「一時」といふのである。

第二には、仏が説法された住処と、その説法をともに同じ心をもつて聞いた聴集とを示して、法は全く信すべきものであることを証明してゐる。「舍衛<sup>しやえ</sup>」とは、城の名であつて、「梁<sup>りやう</sup>」の国では、「聞物<sup>もんぶつ</sup>」と云つてゐる。この城は非常に繁栄してゐて物資に富み、珍しい物があり、その名が遠く四方に聞えてゐたので「聞物<sup>もんぶつ</sup>」と云ふのである。国の名は「憍薩羅<sup>きやうさらか</sup>」（コーサラの音訳）と名づけられてゐる。今、この經典では、城の名をもつて国の名としてゐるので「舍衛<sup>しやえ</sup>」国と言ふのである。この国は、釈尊在世当時の印度における十六大国の一つであつた。その中の「樹<sup>ぎ</sup>」は祇達太子<sup>ぎだたい</sup>の所有する「祇達林<sup>ぎだりん</sup>」であり、その「園<sup>えん</sup>」を購入して所有してゐたのが須達多<sup>すだた</sup>で、彼は、孤兒やひとりぼちの老人に食を給する資産家、つまり「給孤長者<sup>きつこちやうじや</sup>」である。この二人が心を合はして精舍<sup>しやうじや</sup>（僧院）を建てて釈尊に寄進したので、今この兩人の名前をとつて「祇樹<sup>ぎじゆ</sup>・給孤独<sup>きつこどく</sup>・園<sup>えん</sup>」と云ふのである。説法をともに聞いてゐた聴集については（当然そこにゐたことがはつきりしてゐるので）、略して記してゐない。一説によれば、この経を説いてゐた時には、仏は城の奥殿の中にをられ、天上には諸天だけが、下には女官だけがゐて、大士（菩薩）

はそこにはゐなかつた。それでこの經典を信すべきものであることをはつきり証明するには不充分である。何が足りないかといふと、菩薩のことを書くべきなのに書いてゐない。つまり菩薩がゐなかつたと解釈してゐる。しかしながら、この經典全体の結語にあたる「流通説」の最初（『昭和会本』七十二枚目の表）には勝光明を放ちて普く大衆を照すと記されてゐるのであるから、どうして聞いてゐる大衆がゐないと言へやうか。大衆はゐたはずである。大士たちも当然そこにゐたはずである。また、説法された場所とそれを聞いた人々とがはつきりしてゐるといふことから、もしそこで説かれた法は信ずることができるといふのならば、どうして阿闍闍国の王宮といふ住処と宮中の女官といふ聴集を挙げようか。つまり、それだけでは足りないのは判つてゐるではないか。であるから同聞の衆は、「流通説」の初めに書かれてゐるやうに、この經典を後世に弘めるよう、仏が阿難その他に依嘱された時の場所と説法を聞いた人々である、といふことなのである。さう考へるからこそ、次のことがよく判るのである。そこには同聞の衆がゐたのであるが、今この個所ではそのことを省略してゐる理由が明白である、と。

### （研究1）

「我聞」と、「我自然知」との違いについて、太子ははつきりと區別してをられるやうであります。とくに「聞く」といふことを太子がとくに大事なこととお考へになられてゐる点が氣づかしめられ、亡き桑原晝一会員もそのことをよく指摘してをられました。この「聞く」について、太子が「言ふところは、阿難親しく仏に従つて聞くを以て、所伝あやまらず、外道の我自然知の過に異なる」といふ短いお言葉からも、その重大なご関心のほどがはつきり掬みとれるやうな氣がいたします。

(研究2)

「一時」といふ經文の文字を、普通は「ある時」と簡単に解釈してしまひがちですが、太子は「一時」を阿難の心の働きとして「阿難は仏覺三昧を得て、一時に皆領するを明す。故に一時と云ふ」とのやうに、心理的に深く解釈してをられることに気づかしめられます。なほ、太子の別の御著作『維摩經義疏』に、『一時』とは、感應相称かんのおうそうしやうの一時にして説きたまふが故に、物（註、「人」の意）の為に深き利ありとなり」と釈してをられる個所があり、あはせてここでのご指摘と対象せしめられる思ひがいたしました。

(研究3)

太子はこの段落の「通序」の終りの個所で、「同聞衆」のことが『勝鬘經・原典』で省略されてゐることについて、詳細に述べてをられます。太子は、同聞の衆がゐるに違ひないと考へられ、その根拠を、『勝鬘經・原典』の卷末の「流通説」の文言を引用なさつて詳しく述べてをられ、一個所の解釈においても經典全体の前後を照応して解釈してをられることがとくに注目されました。

太子は「如是」等の五事に「同聞」が示されてゐないことを重視されて、「或は云く」と、一説を紹介してをられます。その説は「同聞衆の中に大士（菩薩）を欠いてゐるので、説法の事實をはつきり証明するには不十分である」といふ説であります。太子は、この説に対して、「流通説」の初めに出てくる「勝光明しょうこうみょうを放ちて普く大衆を照す」といふ文言を引用されて、大衆すなはち「同聞の衆」がそこにゐたのだから、大士たちもそこにゐたはずであるとして、「大士が欠けてゐるから「同聞衆」がゐない」といふ説を全く否定してをられます。そして「同聞衆は略して無きなり」と確信をもつて、その見解を表明してをられることが気づかせられました。

太子『義疏』訓点文（昭和会本）——『勝鬘經・原典』の「序説」の中の第二の「別序」に当る個所についての太子の御義疏就第二別序亦開為レ二ト。

第一從ニ時波斯匿王以下。訖ニ敬授勝鬘。名ニ外縁序。

第二從ニ勝鬘得書歡喜以下。訖ニ歎仏実功德。名ニ内因序。

## 右の『義疏』現代語訳

（第一の「通序」に対する）第二の「別序」（この『勝鬘經』といふ經典に対する「特別の序」）についても、また二つに分ける。

その第一は、時に波斯匿王から以下、敬んで勝鬘に授け奉るといふ個所に終るまでを、「外縁序」と名づけ、その第二は、勝鬘、書を得て歡喜すから以下、仏の実功德を歎じ奉るに終るまでを、「内因序」と名づける。

太子『義疏』訓点文（昭和会本）——『勝鬘經・原典』の「序説」の中の第二の「別序」の第一の「外縁序」についての太子の御義疏

言 尊者遣レ書。為下説ニ此經ニ之外縁。云ニ外縁序。勝鬘默念 感レ仏為下説ニ此經ニ之内因。故云ニ内因序。就ニ第一外縁序ニ亦有レ三。

第一王及夫人共談勝鬘心明 根利宜聞ニ深法ニ徳行上。



第二從<sup>ニ</sup>夫人白<sup>ニ</sup>言<sup>一</sup>以下。言<sup>ヒ</sup>畢<sup>リ</sup>。即<sup>チ</sup>作<sup>リ</sup>書<sup>ヲ</sup>讀<sup>ム</sup>ニ<sup>ニ</sup>仏功徳<sup>ノ</sup>遺<sup>ツカ</sup>信令<sup>ハ</sup>聞<sup>カ</sup>。

第三從<sup>ニ</sup>使人奉<sup>ニ</sup>書<sup>一</sup>以下。明<sup>カ</sup>使<sup>ヲ</sup>人奉<sup>ニ</sup>書<sup>一</sup>。至<sup>テ</sup>阿踰闍国<sup>ニ</sup>而奉<sup>ル</sup>上<sup>ニ</sup>。

### 右の『義疏』現代語訳

このやうに外縁<sup>げえん</sup>と内因<sup>ないいん</sup>とに分けたわけは、父親と母親とがその娘・勝鬘に手紙を遣はしたといふことが、この『勝鬘經』といふ經典を説くところの外的原因で、内からの心理的なものとは違ふので、「外縁序」といふのであり、勝鬘がその手紙を受けとつて「心中しづかに『哀愍<sup>あいみん</sup>を垂<sup>た</sup>れて、必ず我をして（仏を）見るを得<sup>え</sup>せしめ給ふべし』と祈り、默念<sup>もくねん</sup>して仏を感じた」ことは、この經典を説くことになつた内的原因、すなはち精神的な心の中における原因であるから、「内因序」といふのである。

第一の「外縁序」についてもまた、三つに分けられてゐる。

その第一に、王とその夫人は、ともに勝鬘の心は、ものを明らかに察することができし、その機根<sup>きこん</sup>（生れつきの能力）は鋭くて、仏の深い法を聞くことが出来る徳行<sup>とくぎょう</sup>を備へてゐるに違ひない、と語り合つてゐる。

その第二に、夫人が白<sup>まを</sup>して言<sup>まを</sup>さくから以下は、王と夫人の二人で話し終へてから、娘の勝鬘に信書を書き、その文中で、仏の功徳<sup>くんとく</sup>を讀<sup>は</sup>めたたへ、それを使ひの者に持たせて勝鬘の許にとどかせ、大乘<sup>だいじょう</sup>の教へのすばらしさを聞かせようとした。

その第三に、使人書を奉じてから以下は、使者がその信書をささげて出かけ、勝鬘が嫁いでゐる阿踰闍国<sup>あゆにやとく</sup>に到着して、それを勝鬘に奉つた次第を説明してゐる。

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——『勝鬘經・原典』の「序説」の中の第二の「別序」の第一の「外縁序」について、太子がとくに語釈をなさつてをられる個所の御義疏

時者。言。勝鬘。應。聞。常。住。二。之。時。也。信。法。未。久。者。謂。信。大。乘。法。未。久。也。言。王。与。夫。人。但。信。小。乘。法。來。久。而。未。信。大。乘。一。如。來。在。一。樹。下。說。法。時。波。斯。匿。王。擊。鼓。來。奉。仏。仏。知。故。問。此。何。聲。也。阿。難。依。実。而。答。時。仏。言。世。王。擊。生。死。鼓。我。為。法。王。一。宜。擊。法。鼓。即。說。法。鼓。經。於。是。王。及。夫。人。始。信。大。乘。未。久。即。遣。使。告。於。勝。鬘。也。一。云。時。者。是。謂。說。法。鼓。經。時。也。解。此。信。法。未。久。一。種。種。不。同。然。推。尋。本。末。唯。此。應。當。故。不。記。也。是。我。之。女。者。讚。重。之。辭。也。言。相。子。不。過。父。母。知。臣。莫。如。君。王。我。子。之。稱。不。別。自。他。唯。在。於。善。今。勝。鬘。既。為。己。子。且。有。明。德。一。應。聞。勝。道。故。亦。自。稱。我。子。也。聰。慧。利。根。者。耳。善。聽。曰。聰。心。明。察。曰。慧。聰。察。爽。明。謂。之。利。根。通。敏。易。悟。者。聞。表。達。裏。謂。之。通。善。聽。之。所。致。照。了。深。明。謂。之。敏。善。察。之。所。致。遇。理。即。解。謂。之。易。悟。利。根。之。所。致。前。句。談。其。性。能。後。句。言。其。功。用。共。相。成。也。稟。教。必。由。善。聰。故。歎。聰。為。首。此。明。器。已。具。一。必。速。解。法。者。一。聞。即。悟。不。待。再。教。心。得。無。疑。者。神。情。開。朗。無。小。乘。疑。滯。也。宜。時。遣。信。發。其。道。意。者。時。有。一。年。時。二。機。時。皆。不。可。失。也。此。明。可。納。実。也。從。夫。人。白。言。以下。第二。遣。信。略。讀。如。來。無。量。功。德。者。聖。德。無。量。不。可。備。陳。一。故。粗。標。三。德。也。第三。明。使。人。致。彼。奉。書。可。見。此。明。正。内。実。可。見。

### 右の『義疏』現代語訳

時とは、その意味は、勝鬘がまさに常住真実の道を聞くべきの時だといふことである。法を信じて未だ久しからず

とは、大乘だいじようの法を信じてまだ日がたつてゐないことをいふので、今までは王と夫人とは小乗の法を久しい以前から信じてゐたので、大乘の法は未だ信じてゐなかつた。如来にょらい（仏世尊ぶつせそん）が一つの樹の下に居られて法を説いてゐらつしやる時、波斯匿王はしりやくが鼓つづみを撃つてやつて来て、仏ほとけのためにその鼓の音で供養くやうし奉たてまつつた。仏はそのことをよく知つてをられて、わざとこれは何の声か（實際は音なのだが、その音の意味は何か）とお問ひになつた。そこで仏弟子の阿難あなんは、事実通りお答へした。その時、仏のおつしやるには、「現世の王である」世王は、生死しよじの鼓つづみ（世俗的に良しとせられる鼓、この身にとつて好ましく思はれる音の鼓）を心をこめて美しい音色ねいろで撃つてゐる。しかし、私は法王であるから、法の鼓（生死の鼓と反対に、常住の世界から発せられるひびきである鼓）を撃ち轟とどろかせようと云はれて、『法鼓經ほふこきやう』を説かれた。そこで王及び夫人おんたは、それを聞いて始めて大乘を信ずるやうになつた。そして時をおかずすぐに使つかひを遣はして娘の勝鬘かみざうのところにもその大乘だいじようの法を告げたのである。一説では、「時」とは、このやうに『法鼓經』をお説きになつた時」だとしてゐるものもある。此の法を信じて未だ久しからずのくだりの解釈については、その他にも種々あつて同じでないが、この『勝鬘經』の筋道をよく考へてみると、「時」とは「大乘の道を聞くべきの時」の解釈が當つてゐると思ふので、他説はここに記さないのである。是れ我が女みづめなりとは、娘を讀よめたたへてゐる言葉である。その意味は、子の心を相あひすることは父母にまさるものはないし、臣下のまごころを知るのは君主や王に及ぶものはない。親が「我が子よ」とほめて言ふ時の親の心には、子に対して自他の區別即ち対立心がないのである。唯その子にとつて最もよからんことを願ひ、また、その子の最もよい所を見抜いた上でのことである。この場合の勝鬘は、まがふ方なく己れの子であり、その上に明德（聡明な徳）があり、勝道しょうどう（常住の道）を聞くことが出来る力を持つてゐるのだから、当然すすんで「我が子」と口に出してはめることができるのである。聰慧利根そうゑりこんとは、教おしへの言葉

を素直に一所懸命に聞くのを「聡」といい、心の中で理を明かに思ふのを「慧」といふ。「聡察爽明」（よく聞きよく思ひ、道理が大変明かにわかる）といふ働きのあるのを「利根」という。通敏にして悟り易しとは、言葉を聞いたときにその表の意味だけではなく、その裏にあるその人のこころもちの奥までをすぐに達するのを、「通」といふのであるが、それは「善く聴く」といふことから、そこに達するのである。また、知慧の光で（どここほることなく）よく照らし、理を深く明らかにさとするのを、「敏」といふのであるが、それは「善く念ふ」ところから、そこに達するのである。道理に遇つてすぐに了解するのを、「悟り易し」と言つてゐるが、それは「利根」のはたらきから来るのである。前の句すなはち「聡慧利根」は、心の「性能」（はたらき）の方を言つてをり、後の句すなはち「通敏にして悟り易し」の方は、「功用」（性能の結果）を言つてゐるのである。さうして、この二つが一緒になつて「徳」を成就するのである。教へを授かるのは、必ず心静かに聴き入れるといふ「はたらき」によるものである。だから、この經典の本文は、その初めに「聴」の働きのすばらしいことを記してゐるのであつて、さうした所に、勝鬘が常住の道を授かる器（能力）が已に完備してゐることを明らかにしてゐるのである。必ず速に法を解してとは、一度教へを聞いたならば、ただちにそれを悟つて、再び教へる必要がないのだ、といふことである。心疑ひ無きを得んとは、その悟りの気持が「神情開朗」（からつとしてゐて、曇りのないこと）といった具合で、ここには、小乗の教へにとどまつてゐる者に見られるやうな、くよくよ疑つたり、低迷したりする気配は全くないのである。宜しく時に信を遣はして其の道意を発すべし、この所の「時」には二つの意味がある。一つには、「年の時」即ち「普通に経験し意識してゐる時」であり、もう一つは、「機の時」即ち「勝鬘が常住真実の道を聞くことができるきつかけを含んでゐる時」であり、この二つの「時」は、ともに無視するわけにはゆかない。この二つの「時」を無視しないことによつ

て、はじめて真実が伝へられることを説明してゐるのである。

夫人白して言さくから以下は、「外縁序」の中の第二段である。信書を遣はすのに、略して如來の無量の功徳を讀じてとあるのは、如來の徳は「聖徳無量」で、精しく陳べることは到底出来ない。そこで、おほまかに、三徳（法身と解脱と般若）だけを示して書いたのである。

「外縁序」の第三段目は、使者が阿踰闍国にゆき、勝鬘夫人に信書を奉つたことを説明してゐる。經典の本文をよく見ればそれがわかる。如來の教へが實際に夫人の心の中に伝へられたことを説明してゐるのである。經典の本文をよく見なさい。

# （研究1）「時」について

「時に波斯匿王……」のところの「時」は、『勝鬘經宝窟』（隋の嘉祥大師吉藏の注）など中国の諸師の注には、「波斯匿王及び末利夫人が法を信じて未だ久しからざる時に」の「時」の意味になつてをり、『勝鬘經』における時間的説明（「年の時」）にとどまつてゐるのに対して、聖徳太子の御釈は、「勝鬘應に常住を聞くべき時」（「機の時」となつてをります。勝鬘夫人が常住の道を聞くといふところが常に中心として具体的に考へられてゐる御釈であります。その「時」は、「阿難一時仏」の「時」も、親鸞のいふ「常にとは時々も思へといふことなり」といふ「時」も、小林秀雄氏のいふ「歴史とは上手に思ひ出すことだ」といふ「思ひ出す」「時」も、また『論語』の「学而時習之」（「学んで時に之を習ふ」）の「時」も、同じ「時」であると思はれます。そこには、人類文化の根底をなす普遍的な求道精神が古代から脈々と流れてゐて、機を得て地下水のやうに噴き出して来るといふ感じがあります。しかも太子の御

釈においては、その「時」が、勝鬘が父母から信書を得て歓喜した「時」とか、両親が信書を遺る「時」とか、すべて具体的な「年の時」をも指してをられます。このやうに、「年の時」と「機の時」とをふたつながら大切にしていることが、御文章の中から具体的に読みとれるのであります。

（研究2）「世王は生死の鼓を撃つ」について

「世王」の「世」は「世間虚仮」の「世」と同じであり、「世王」とは虚仮なる世間に生きてゐる王で、その王の撃つ鼓は「虚仮の鼓」であります。太子は、『勝鬘経・原典』の中にある「十大受章」の最後の個所の御解釈で、「若し菩薩大乘に決定せざる者は、則ち正法を摂受する欲を得ること能はず……所樂に随つて入り、永く凡夫地を越ゆるに堪任せず」と記してをられます。大乘に決定せざる者すなはち「世王」もその一人でありますから、ここにある「所樂」は、生死の世界の凡夫の欲であり、したがつて「生死の鼓」は「所樂の鼓」と同じことになりませう。つまり、「生死の鼓」は、常住の道によらずに自分の好みの心から撃ち出す鼓で、具体的に言へば、この身体が好ましく感じる鼓であります。これに対して「法鼓」は、「生死の鼓」とは次元のちがふ鼓であり、大乘に決定した人間の心の奥底から撃ち出された鼓でありませう。

（研究3）「我が子の称は、自他を別たす唯善きに在り」について

「我が子よ」と自分の子をはめて言ふときの親心は、自他を区別する心即ち対立する気持がありません。子供の悲しみは親の悲しみで、この親心は仏の慈悲にたとへられます。人間は、この親心を以てしか仏の慈悲を思ひ測ることが出来ません。しかし、子に対する盲目な愛情や身勝手な過保護などの親心は、ここに言はれた「我が子の称」とは同日に論ずるわけにはまゐりません。「唯善きに在り」との御言葉を、噛みしめるべきではないでせうか。

(研究4)「神情開朗」について

『顔氏家訓』に「人在少年、神情未定」(人少年の時に在るや、神情未だ定まらず)といふ語があり、「神情」は心情と同じ意味で、「ここちもち」といふ意であります。また『万葉集』巻五の歌(歌教番号八六四・八六七)の詞書に、「宜(註・人名)啓す。伏して四月六日の賜書を奉る。跪きて封函を開き拝みて芳藻を読む。心情開朗……」とあります。以上二つの例は、ともに「ここちもち」の意であります。しかし太子のこの所の「神情」には、単にここちもちといふより、何かもつと高い、さはやかな、すがすがしい精神が表現されてゐるやうに思はれます。

太子『義疏』訓点文(『昭和会本』)——『勝鬘經・原典』の「序説」の中の第二の「別序」の第二の「内因序」についての太子の御義疏

從<sup>リ</sup>勝鬘得<sup>テ</sup>書<sup>ヲ</sup>以下。第二内因序。分為<sup>ス</sup>五<sup>ト</sup>。

第一明<sup>ニ</sup>得<sup>テ</sup>書<sup>ヲ</sup>歡喜<sup>ス</sup>。亦可<sup>シ</sup>見<sup>フ</sup>。生<sup>ジテ</sup>希<sup>ク</sup>有<sup>ラ</sup>心<sup>ヲ</sup>者<sup>トハ</sup>。謂<sup>ク</sup>聞<sup>ク</sup>常<sup>ニ</sup>住<sup>ス</sup>一<sup>ヲ</sup>也。通<sup>シ</sup>而<sup>シテ</sup>為<sup>シ</sup>論<sup>ヲ</sup>。常<sup>ニ</sup>住<sup>ス</sup>本<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>。但<sup>シテ</sup>聞<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>希<sup>ク</sup>。故<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>ニ希<sup>ク</sup>有<sup>ラ</sup>。

二初行偈欲<sup>ニ</sup>修<sup>ス</sup>供養<sup>ヲ</sup>。而勝鬘但見<sup>ル</sup>書<sup>ヲ</sup>。那<sup>ニ</sup>得<sup>テ</sup>言<sup>フ</sup>我<sup>ハ</sup>聞<sup>ク</sup>仏音聲<sup>ヲ</sup>者<sup>トハ</sup>。聲<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>伝<sup>ヘ</sup>意<sup>ヲ</sup>。書<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>伝<sup>ヘ</sup>聲<sup>ヲ</sup>。故書義

云<sup>フ</sup>聞<sup>ク</sup>仏聲<sup>ヲ</sup>。又見<sup>ル</sup>聞<sup>ク</sup>覺<sup>ス</sup>者<sup>トハ</sup>。從<sup>テ</sup>書<sup>ヲ</sup>得<sup>テ</sup>解<sup>ス</sup>亦<sup>モ</sup>稱<sup>ス</sup>為<sup>シ</sup>聞<sup>ク</sup>。世<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>未<sup>ダ</sup>曾<sup>ラ</sup>有<sup>ラ</sup>一<sup>ヲ</sup>者<sup>トハ</sup>。言<sup>フ</sup>我<sup>ハ</sup>理<sup>ヲ</sup>雖<sup>モ</sup>本<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>。但<sup>シテ</sup>擧<sup>ゲ</sup>故

我<sup>ハ</sup>云<sup>フ</sup>未<sup>ダ</sup>曾<sup>ラ</sup>。明<sup>ニ</sup>一<sup>ヲ</sup>生<sup>ス</sup>未<sup>ダ</sup>曾<sup>ラ</sup>聞<sup>ク</sup>常<sup>ニ</sup>住<sup>ス</sup>一<sup>ヲ</sup>。真<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>者<sup>トハ</sup>。聖<sup>ノ</sup>體<sup>ヲ</sup>円<sup>ニ</sup>備<sup>フ</sup>非<sup>ニ</sup>偽<sup>ニ</sup>。曰<sup>ク</sup>真<sup>ニ</sup>。至<sup>ニ</sup>德<sup>ニ</sup>凝<sup>リ</sup>然<sup>ル</sup>。無<sup>ク</sup>虚<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>実<sup>ニ</sup>。

有<sup>リ</sup>一<sup>ヲ</sup>行<sup>ヲ</sup>偈<sup>ヲ</sup>。明<sup>ニ</sup>默<sup>ニ</sup>念<sup>ス</sup>感<sup>ス</sup>。仏<sup>ヲ</sup>言<sup>フ</sup>如<sup>ク</sup>來<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>為<sup>シ</sup>物<sup>ヲ</sup>無<sup>ク</sup>偏<sup>ニ</sup>。我<sup>ハ</sup>雖<sup>モ</sup>無<sup>ク</sup>知<sup>ラ</sup>女<sup>ヲ</sup>人<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>亦<sup>モ</sup>入<sup>リ</sup>世<sup>ニ</sup>數<sup>ニ</sup>。願<sup>シ</sup>垂<sup>テ</sup>慈<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>。

見<sup>ル</sup>。

一行偈明三仏心ニ 其感ニ。而応ニ 於空中ニ 者。若在ニ 宮内ニ 或履涉艱難ニ。且欲ニ 表ニ 如来法身無相ニ 猶如ニ  
虚空ニ 也。如来頂後常光但七尺ニ 而已。今欲ニ 表ニ 勝鬘將説ニ 一乘内果常住之理ニ。故普身皆放ニ  
一行偈明三業供養ニ 可見。接足ニ 礼ニ 者。雖在ニ 空中ニ。以ニ 接足礼ニ 致ニ 敬ニ。非ニ 適接ニ 也。

## 右の『義疏』現代語訳

勝鬘書を得てから以下は、前段に述べたやうに、両親が勝鬘に手紙を遣はした、といふ外からの働きかけ（外縁）に対し、勝鬘自身の心理的な動きを述べた内因の序である。その内容は、五つに分けられて書かれてある。

第一番目は、勝鬘が両親からのお手紙を得て、非常に喜んでゐることを述べてゐる。それは經典原文をよく見るがよい。希有の心を生じてとは、常住真実の教へを聞いたことを指すのである。一般的にいへば、常住真実といふものは、本来もともと存在してゐるものである。しかし、これを聞くことができることが、極めて稀であるから、「希有」といふのである。

五つに分けた第二番目は、最初の一行の偈（詩歌）である。（經典原文の「我れ仏の音声を聞きたてまつる」より「当に供養を修すべし」までを指す）。この部分は、勝鬘夫人が積尊を供養したいと願つてゐることを現はしてゐる。しかし、勝鬘は、ただ両親からもらった手紙を見ただけであるのに、どうして我れ仏の音声を開きたてまつると言ふことができたのか、といふと、「声」といふものは、その人の「意」を伝へるものであり、「書」（手紙）といふものは、書いた人の「声」を伝へるものである。だから実際に手紙を読んだといふことは、その中に書かれてゐた仏の常住真実の教へを読んだといふことになる。その意味から「仏の声を聞く」といふのである。勝鬘が仏の教へ



を、「見し・聞し・覚する」といふことは、仏の教へを文字で読んで（見し）、そこに仏の声を聞いて（聞し）、覺りにまで到達する（覺する）といふことなのである。従つて勝鬘が両親からの手紙を読んだだけで心が開かれたといふのは、仏のみ声を聞いたことになるのである。世に未だ曾て有らざる所なりといふ意味は、本来、「我」（眞実なる我）は、もともと存在してゐるものであるけれども、「故我」（本然の「我」に気づかない我）の影響で、常住眞実を聞いたはずであるのに、それに気づかない。そこで「未曾」といつて、この世に生を享けてから今日までに未だ曾つて常住眞実なるものを聞かなかつたといふことを説明してゐるのである。眞実なる者とは、釈尊のことであり、釈尊のお姿は、外から見て円かに、すべてのものが備はつてゐらつしやつて、偽りが全くないのでこれを「眞」といひ、内からいへば、すぐれた内心の徳が、渾然と一つに融けこんでゐらつしやつて、一つも欠けたところがないので、これを「実」といふのである。

第三番目には、次の一行の偈がある（それは「仰いで惟みれば」から「必ず我をして見ることを得せしめたまふべし」までである）。この箇所では、勝鬘が感動して、瞑目し、言葉もなく、ただひたすらに仏に思ひを集中して、感應の世界において、仏のすばらしさを感じたことを説明してゐる。この偈の意味は、次の通りである。即ち、「如来はこの世に現はれ給うて、衆生を救済なさるのにわけへだてがない。私（勝鬘）は「無知」の女人ではあるけれども、如来が現はれ給うてゐるこの世に生を享けてゐるものの一人である。仏様よ、どうか慈心を垂れ給うて、み姿をお見せ下さいますやうに。」

第四番目の偈は、次の「即ちこの念を生ずる時」から「無比の身を顕示したまへり」までの一行の偈であつて、ここでは、仏が勝鬘の祈念に感應されたことを説明してゐる。ところで、勝鬘の祈念に対し、經典原文では、仏

は空中にみ姿を現はされたとしてゐるが、それは、もし仏が宮廷内にみ姿を現はされたとするならば、あるいは思ふままにお歩きになることが難しいに違ひない。それにまた、仏のみ姿は、真理そのものを現はされる法身であり、その法身のお姿は、固定的な姿としては捉へられないものであり、それはちやうど何ものもさへぎるもののない大空のやうなものであることをお示しにならうとされたので、空中にお姿を現はされたものである。仏のいつもの後光は、頭頂の後一個所から放たれるもので、ただ七尺に及ぶだけであるが、今は勝鬘に対して、すべてのものが円かに救はれる常住眞実の道理を示さうとなさつて、お身体すべての個所から光を放たれたのである。

第五番目は最後の一行の偈であり、即ち「勝鬘及び眷屬」から「仏の実功德を敷じたまつりにき」までである。この一行は、身・口・意の三業（三つの行為）すべてによつて、釈尊に供養したてまつる、といふ勝鬘たちの心を説明したものである。（即ち、「頭面を以て足に接して礼し」とは「身」による供養であり、「清淨の心を以て」とは「意」による供養であり、「敷じたまつりにき」とは「口」による供養である）。經典原文をよく見るがよい。ここに足に接して礼しとあるが、これは勝鬘たちは宮廷内にゐて、仏は空中にをられるので、あたかも仏のみ足に接するやうに接足礼をもつて拝礼されたのであり、勝鬘たちの内心の世界の表現なのである。決して空中にをられる仏のおそばまで行つて「足に接した」といふのではない。

（研究1）「常住」と「本然」との二語について

「常住」とは、「生滅変化のないもの」を言ひますが、観念的な解釈を求めようすると、「常住とはそもそも何か」といふやうな疑問に切り替へて、観念的な実体を求めようとする誤りが生じます。これに対して、太子は、「常住」

を「本然なるもの」と言はれ、すなはち、観念的に人の頭の中で作られるものとは違つて、「本来、人間の心の中に、永久生命として実在してゐるもの」としてお考へになつてをられます。このことは、味はふべき大切なことと思はれます。

## （研究2）「頂受」と「読誦」との二語について

經典原文に「頂受」とあるのは、「頭の一番高い所にさしあげて頂く」といふことであつて、勝鬘が両親から届けられた手紙を「歡喜し頂受し」と述べられてゐるところに、勝鬘の謙虚な歎びの態度が簡潔に表現されてゐると思はれます。「読誦」とあるのは、その手紙を「声を出して読むこと」をさしてをり、太子は、この經典の表現に深く注目され、「声は以て意を伝へ、書は以て声を伝ふ」と『義疏』で御指摘になつてをられます。「声は以て意を伝へ」の「意」は、「こころ」の意味にとるべきです。書かれた文字を声を出して読むことによつて、その文字を書いた人のこころを、より具体的に正確に受けとめることができます。『義疏』のこの二句は、こころをこめて書かれた文字を見ながら、書いた人のこころそのものを正確に受けとめる、といふことの深い関連性を鋭くみつめられたものと拝察されます。

## （研究3）「見・聞・覚者。從書得解亦稱為聞」の読み方について

經典原文に「我れ仏の音声（おんしやう）を聞きたてまつる」とあるのに対して、太子は「見・聞・覚者。從書得解亦稱為聞」と書いてをられます。これは、諸本によつて読み方が異つてゐます。たとへば「見も聞も覚なれば」といふ読みもあり、「見し聞し覺することは」と読んでゐる本もあり、また、「見し聞するも覚なれば」といふものもあります。我は、検討の結果、仏の教へを書いたものを見て、そこに仏の声を聞き、覺る、といふ「覺」に至るプロセスと見る

べきであらうといふことになり、「見し聞し覚するなれば」と読むことにいたしました。

この読み方で『義疏』を解釈いたしますと、勝鬘が両親から手紙を戴き「解を得た」こともまた、そこに「聞」といふ働きがあつたと理解できます。太子が「聞」といふことを重視してをられることは、たとへば「耳に善く聴くを聡と曰ひ」「たび聞きて即ち悟る」と言はれるやうに、『義疏』の各所に見られることであり、それは、また、太子御自身の「書」(經典)に対する御態度であつたと思はれます。ついでながら、太子を「和国の教主」と讃仰した親鸞も、「聞信」といふことを重視してをります。(研究10参照)

(研究4)「我は理として本然なりと雖も、但故我に抛りて未曾と云ふ」について

ここで「我」と「故我」とが問題になります。初期インド思想一般からいへば、宇宙を支配する神格を、今まで外に求めてゐたものが、ひるがへつて、内に眼を向けるやうになつた結果、そこに「我」(ātman)を発見したといはれてをります。仏教思想では、一般に「我」を「真実なる我」と考へ、「故我」を「真実なる我に気づかない我」といふ意味にとります。ここでもそのやうに考へられます。太子は、『十七条憲法』に、「人尤惡しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ」(第二条)、「尅く念うて聖と作る」(第七条)と言つてをられます。それは、人間は、本来「聖となるべき」真実なる「我」を持つてゐるにもかかはらず、習慣になづんでしまつて、「真実なる「我」に目覚めない「故我」にとらはれてしまつてゐる」とお考へになつたものと思はれます。かうした点にも、『義疏』と『十七条憲法』とは、思想的に深い脈絡のあることに気づかせられます。

(研究5)『勝鬘經・原典』にある「所言 真実者」の読み方について

「所言 真実者」も、諸本、読み方を異にしてゐて、「言ふ所真実ならば」とも、「言ふ所の真実者に」とも読んで

をります。前者の読み方をとれば、仮定法、すなはち、条件的な表現となつて、「歆喜し頂受し」てゐる勝鬘の言葉としては、ふさはしくなりました。後者の読み方に従つて、「言ふ所の」といふ意味を、「いはゆる」の意味にとれば、やはり、「歆喜し頂受し」てゐる勝鬘の心情にそぐはない、何か冷やかな感じがします。また、これを「のたまふ所の」と読んで、その意味を、「釈尊の仰せられる所の真実なる法身」と理解してしまふと、法身は無相でありますから、太子が『義疏』の中で、これを「聖体円備」と仰せられてゐることと矛盾してきます。そこで、本書では、「のたまふ所の」と読むことにしましたが、それは、「釈尊が仰せられる所の」といふ意味ではなく、勝鬘の「両親が仰せられた所の」といふ意味にとりました。さうすれば、道を伝える両親の言葉に、素直に従ふ勝鬘の美しい心が偲ばれることになる、と考へたからであります。

(研究6) 「聖体円備」と「至徳凝念」との二語について

太子が釈尊の徳を、「聖体円備」「至徳凝念」と説明なさつたのは、釈尊の徳を、外に現はれた仏の姿と、内にたたへられた仏の心とに分けて示されたものです。そして、それをさらに、「真」と「実」といふ言葉で表はしてをられます。ここにいふ「真」も「実」も、「まこと」といふ意味でありませう。そして、その「真」と「実」とを、太子は、「偽に非るを真と曰ひ」「虚無きを実と曰ふ」といはれてゐます。「偽」とは、「いにしへ」に「為す」と書くように、人為的、意図的に、「我の心をもつて、仏の心を推察する」といふ、即ち、「はからひ―いつはり―」であります。「虚」とは、「実体のないもの―嘘―」のことであります。さきの「はからひ―いつはり―」でないものを「真」といはれ、あとの「実体のないもの―嘘―」のないものを「実」と御説明になつてをられます。これはすばらしい御指摘と思はれます。以上の御指摘は、法隆寺の近くの中宮寺にある「天寿国曼荼羅繡帳」の中に書かれてゐたといはれる「世間

虚仮唯仏是真」といふ太子の大変に意味深い「御遺語」に照合されるものがあると思はれます。(研究10参照)

(研究7)「黙念して仏を感じる」について

「黙念して仏を感じる」といふこの言葉は、既に「序説」の初めにも見られたお言葉ですが、何度読んでも感銘を受けます。「黙」は「瞑目」であり「沈黙」であります。「念」は「祈念」であり「讃仰」であります。瞑目し、沈黙し、ひたすらに仏に思ひを集中するところに、仏を感じることができるのであります。

(研究8)「我れ無知の女人なり」と「世の数に入る」との二句について

「我れ無知の女人なり」とは、勝鬘夫人が仏弟子とならない以前の凡夫の身といふことではなく、勝鬘自身の自覺の言葉ととるべきでせう。至らない、未熟な、覚ることの困難な無知な女人である、とみづからのつたなきを歎く言葉と思はれます。太子は、この姿を劇的にとらへられ、勝鬘の言葉からその心を察せられたのであつて、太子の読みの深さに驚歎いたします。なほ、「世の数に入る」といふ御表現は、後世に楠正行が辞世の歌で「かへらじとかねて思へば梓弓亡き数に入る名をぞとどむる」と詠んだのが連想させられる語でもあり、大和言葉ではないでせうか。さういふ語感が感ぜられます。

(研究9)「接足礼」について

「接足礼」についての太子の御釈は、仏教の經典を初めて読む当時の人々のために、噛んで含めるやうに書いてられて、しかも、御説明の仕方が、まことにのびやかに感ぜられます。太子の御釈は、この「接足礼」を、勝鬘たちが、仏のみ足に、直接に接して礼したといふことではない、と御説明になつて、勝鬘たちの、仏を讃仰する心の深さを示すこととおとりになられたものです。すなはち、人々が、經典の原文をそのままに受けとつてしまつて、迷信的

妄想に走るのを懸念せられた御配慮に基づく御説明かと思はれる所でもあります。

(研究10) 聖徳太子のお言葉と親鸞の言葉について

「世間虚仮唯仏是真」の御遺語は、仏典には出典がなく、太子の独創の御言葉と思はれます。「世間虚仮」と「唯仏是真」とは、それぞれ独立した二つの言葉として考へるのではなく、両方で一つの成句をなしてをり、「世間を虚仮であると感じる心に、仏の真実を仰ぐ心が生きてくる」といふことであらうかと思はれます。これに関連して、『歎異抄』の中の、親鸞の言葉が思ひ出されます。それは、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにおはします」といふ言葉です。「煩惱具足」とは、何もかも不足の人生において、煩惱だけは八万四千皆揃つてゐるといふことです。「火宅無常」とは、『法華経』に出てゐる言葉で、長者の家に火がついたが、子供は、それを知らずに遊んでゐるといふ話を譬へにして、この世の中も、ちやうど火のついた家のやうなものであつて、いつどうして死ぬともわからない。何一つ当にならなし、何一つ頼りにならないといふことです。太子の言はれた「世間虚仮」とは、まさに親鸞のいふ「よろづのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに」と照応されます。親鸞は、生きてゐる人間のすることすべて、それは、自分のことをみても、他人のことをみても、みな「そらごと、たわごと」で、「無私」のまことがないと「悲歎述懐」してをります。親鸞にとつては、「そのやうに感ずる」ことは、結局は、それによつて如来の恩徳を「知らしめられる」といふことであり、だからこそ、如来の法の尊さを聞く以外に道がない、と感じたのだといへませう。「よろづのこと、みなもてそらごと、たわごと」と感ずるからこそ、如来の御恩の深さを知らされるのであり、法の尊さを聞くことができるやうになると受けとられます。つまり親鸞は、「よろづのこと、みなもてそらごと、たわご

と」と感ずる心に、「ただ念仏のみぞまことにおはします」と言つてゐるのです。この「ただ念仏のみぞまことにおはします」といふ親鸞の言葉は、太子の「唯<sup>ゆいぶつ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>是<sup>ぜ</sup>真<sup>しん</sup>」といふ御言葉と照応してをります。かうみてきますと、親鸞のさきの告白は、太子の御言葉を讃仰して、これを当時の大和言葉で述べあらはしたとさへ思はれます。ここに、太子から約六〇〇年を経て親鸞に受け継がれた信仰の系譜が、はつきりとうかがはれる思ひがいたします。